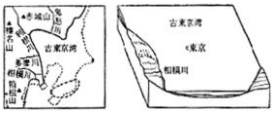
# 印旛沼流域のなりたち

## －過去12万年の人と土地の歴史とは－

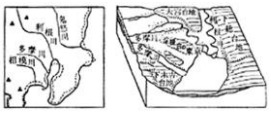
**印旛沼と周辺の低地・台地は氷期・間氷期の海水準変動、気候変化によって形成されました。**

約12万年前




約12万年前、下総台地は古東京湾の海底でした。この海底が隆起して現在の台地面になった。

約６万年前

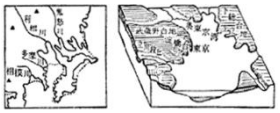


約6万年前の海水準の停滞期に下末吉面の下位に武蔵野面と呼ばれる地形面が形成された。

約2万年前

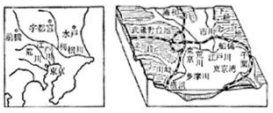
約2万年前の最終氷期最寒冷期に海水準は100mほど低下し、東京湾には古東京川が形成された。

約6千年前



氷期が約1万年前に終わり、海水準は上昇し、約6千年前に現在より約3m高くなり、台地を刻む谷は溺れ谷になった。

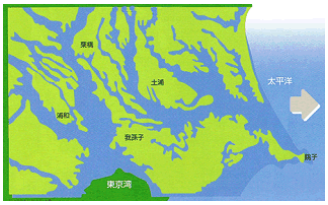
現在



その後、海水準は現在のレベルまで低下し、沖積低地が形成された。（貝塚、1977より）

**印旛沼流域に人の暮らしが現れると、自然との闘い、改変、共生の歴史が刻み込まれていった。**

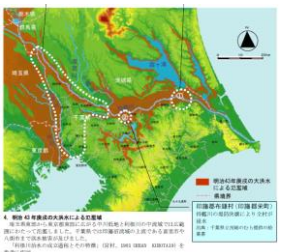
縄文時代の関東平野




平安時代の関東平野

縄文時代は海が関東平野中央部まで侵入したので、関東の縄文人は貝をたくさん食べていました。平安時代になっても関東平野の大部分は湿地でしたが、江戸時代に徳川家康によって利根川が鬼怒川に接続され（利根川東遷）、それ以降、利根川下流部は水害に悩まされることになりました。　（国土交通省ホームページより）

明治43年の大洪水



明治43年(1910年)の水害(庚戌の大洪水)の被害は非常に大きく、利根川下流域や印旛沼周辺は広い地域で湛水し、かつての香取の海がよみがえったようでした。今を生きる私たちは水害からどのように守られているのか、考えてみよう。(千葉県ホームページより)

現在の印旛沼流域

**人は印旛沼や周辺の土地利用、水循環を変えることによって、人の安全、安心を作り上げてきた。**

これは1947年に米軍が撮影した空中写真です（米軍写真）。利根川は洪水時に水位は約5mに達しますが、印旛沼の水位はそれより低く、洪水時に利根川の水が印旛沼に逆流して“逆三角州”が形成されています。沼の周囲の沖積低地には、古い時代の人工堤防や、堀上畑が存在し人々が長い間、水と闘ってきたことを記録しています。

水害に苦しめられていた印旛沼ですが、昭和44年（1969年）に竣工した印旛沼開発事業により、沼は埋め立てられると同時に、洪水は制御され、豊かな穀倉地帯へ生まれ変わりました。この写真は2001年の空中写真ですが、50年前の写真と比較して、私たちが得たもの、失ったものを考えて見ましょう。

**次に、人間活動がもたらした変化として窒素をとりあげ、印旛沼流域における実態をみてみます。**